

# マリー・アントワネット

2006(平成18)年10月23日鑑賞(試写会・TOHO シネマズなんば)



監督・脚本・プロデューサー＝ソフィア・ Coppola / 原作＝アントニア・フレイザー『マリー・アントワネット』上下(早川書房刊) / 出演＝キルスティン・ダンスト / ジェイソン・シュワツマン / アーシア・アルジェント / マリアンヌ・フェイスフル / リップ・トーン / ジュディ・デイヴィス / スティーヴ・クーガン / ジェイミー・ドナン / ローズ・バーン / オーロール・クレマン / シャーリー・ヘンダーソン (東宝東和、東北新社配給 / 2006年アメリカ、フランス、日本合作映画 / 123分)

……ソフィア・ Coppola 監督が描く『マリー・アントワネット』は、女性ならではの視点が特徴。ベルサイユ宮殿の豪華絢爛たる宮廷絵巻が、さまざまな人間関係に焦点を当てながら展開されていく。しかし、よく知られている物語の羅列は意外と退屈で、激動する時代背景や高揚する民衆のエネルギーとの対峙などの熱気は伝わってこない。そして、私には18世紀のベルサイユ宮殿とポップ調・ロック調ミュージックとの融合(?)にも違和感が……。さらに、堂々とした(?)フェルゼン伯爵との不倫はいかがなもの……。良くも悪くも、これがハリウwoodsの描くマリー・アントワネット物語の限界かも……。

## 期待感をもって臨んだが……

この『マリー・アントワネット』の試写会は、9月22日にオープンしたTOHOシネマズなんばで行われた。内覧会でそのすばらしい施設と音響は実感済みだが、今日はじめて「スクリーン2」という1番大きな劇場の客席に座ることに……。その楽しみに加えて、今日はあのフランシス・フォード・ Coppola を父に持つソフィア・ Coppola 監督が描くマリー・アントワネットの物語へ大いなる期待感をもって臨んだが、残念ながらその期待はかなり裏切られることに……。

## 豪華さは超一流だが……

この映画は良くも悪くも、「これぞハリウッド映画！」という感じ。製作費をいくら投入したのかわからないが、ベルサイユ宮殿の豪華さ、宮廷衣装や舞踏会の華やかさ、そして浪費に走るマリー・アントワネットの豪遊ぶりはすごいもので、これでもか、これでもかというほど華やかな様子を見せてくれる。したがって、多分女性客には好評なはず……。

さらに、女性監督ソフィア・ Coppola監督があえて女性の視点を強調したためか、「教科書に出てくるマリー・アントワネットを撮る意味はない」という気負い(?)の中、「恋をした、朝まで遊んだ、全世界に見つめられながら。」というパンフレットの謳い文句どおり、マリーとポリニャック公爵夫人(ローズ・バーン)らとの交遊関係やルイ15世(リップ・トーン)の愛人デュ・バリー夫人(アーシア・アルジェント)との対立関係等を中心とする宮廷模様を描いていく。したがって、マリー・アントワネットを中心としたそれぞれの人間関係はよくわかるのだが、私には「だから一体ナニ……?」という感じで面白くもなんともない……。

さらに、これは監督のせいではないのだが、私にはやはり英語をしゃべるマリー・アントワネットにはどうも違和感が……。『マリー・アントワネットの首飾り』(01年)の時は、ストーリー展開の面白さがまさっていたため(『シネマルーム1』68頁参照)、あまりそのマイナス面を感じなかったが、スローで抑揚の乏しい物語を観ていると、その弱点がモロに……。

## 事実の羅列だけでは……?

日本では池田理代子作の『ベルサイユのばら』そして宝塚歌劇の『ベルサイユのばら』が有名だし、大地真央演ずるミュージカル『マリー・アントワネット』も好評だから、マリー・アントワネットについての次のようなお話は誰でも知っているもの。すなわち、

- ①14歳でオーストリアからフランスへ嫁ぎ、
- ②ルイ15世の愛人デュ・バリー夫人と対立し、
- ③ルイ15世の崩御でルイ16世が王位を継承するとともに王妃となり、
- ④最初に女の子を、2番目に男の子を産み(歴史上の事実としては、さらに3番

目の男子、4番目の女子と続くが映画上はそれは省略……)、⑤スウェーデンのフェルゼン伯爵と恋の炎を燃やし、⑥別荘としてプチ・トリアノン宮殿をプレゼントされ、自然の中での生活をこよなく愛し、⑦バステューユ牢獄の襲撃に続いて民衆がベルサイユ宮殿に迫る中、脱出を拒んだルイ16世と共に民衆の手によってパリに送られ、⑧最後に断頭台の露と消えた。

しかるところ、この映画はこの最後の部分をあえてカットし、ベルサイユ宮殿を去るまでのマリー・アントワネットの有名な物語をただ羅列的につないだだけ……。

### こんな音楽は……？ あんなダンスは……？

映画の成否には音楽が大きなウエイトを占めているが、この映画の大きなチャレンジは、18世紀のベルサイユ宮殿とマリー・アントワネットを描く物語にポップ調、ロック調の音楽を多用したこと。オリヴィア・ハッセーが主演した『ロミオとジュリエット』（68年）や現在公開中の『トリスタンとイゾルデ』（06年）の場面に登場する、あの時代の舞踏会のダンスはスローで上品なものだったはず。それと同じようなダンスが、マリーがオーストリアからフランスへ嫁ぎ、最初にルイ15世の孫であるフランスの王太子ルイ・オーギュスト（ジェイソン・シュワルツマン）と踊るシーンに登場する。しかし、場面の切り替え時のバックに使われる音楽はポップ調、ロック調で、思わず私はこりゃ一体ナニ、とってしまったほど……。

さらに、私が驚いたのは、少しずつ宮廷生活に馴れてきたマリーが取り巻きたちと一緒に出かけた仮面舞踏会で踊るダンスシーン。あの時代、あんなに多くの男女ペアが、あんなアップテンポの曲に乗って激しく踊るダンスなんて、ホントにあったの……？

### 詳細に描く夫婦生活の様子は……？

女性監督らしく、ベルサイユ宮殿におけるフランス流の作法や新婚初夜のしきたりなどを詳細に紹介するソフィア・ Coppola監督は、前半のほとんどを、狩りばかりに精を出し、同じベッドに寝てもマリーの肌に触れようとしないオーギュスト王太子とそれに戸惑うマリーの姿を描くのに充てている。母親マリア・テレ

ジア（マリアンヌ・フェイスフル）から、「この結婚は同盟だから、一刻も早く世継ぎを」と言われていたマリーは、そのことを十分理解し、彼女なりに努力しているのだが、夫が目を向けてくれないものはどうしようもない……？

その結果、彼女はその寂しさ、虚しさを紛らわせるかのように、取り巻きを従えての浪費、ギャンブル、パーティーに精を出すのだが……。そんな危機的な夫婦生活を救ったのが、マリーの兄のヨーゼフ2世（ダニー・ヒューストン）による、ルイ16世となったオーギュストへの男としてのアドバイス。さて、そのアドバイスとは……？

### こりゃ完全な不倫だが……

マリーが仮面舞踏会で知り合ったのが、『ベルばら』ファンなら誰でも知っているスウェーデンの貴公子フェルゼン伯爵（ジェイミー・ドーナ）。新婚にもかかわらず夫に抱いてもらっていないマリーは、この出会いではじめて男性に対する心のときめきを感じたらしい……？

最初の出会いはそれだけだったが、フランスは当時イギリスへの対抗上、アメリカの独立戦争を支援していたため、その戦いから戻った軍人たちを慰労した会で再び彼と出会ったから、もう止まらない……。取り巻きたちと軍人たちとの間で開かれたパーティーは、今ドキの「すべて合意済みの合コン」のようなもの……？ 当然のようにマリーはフェルゼン伯爵と結ばれ、しばらくの間その不倫関係が続くことに……。

ここらがいかにも即物的なハリウッド流……？ 『ベルばら』でも大地真央の『マリー・アントワネット』でも、マリーとフェルゼン伯爵は決して結ばれることはなかった（？）から、美しい物語として語り継がれているもの……。王妃がこれだけ堂々と不倫してもいいの……？ ソフィア・ Coppola監督の描き方は、わしゃわからん……。

### あっけない幕切れは意図的……？

大地真央の『マリー・アントワネット』では、断頭台の露と消えていく直前のマリーが、「私はフランスの王妃です！」と誇り高く宣言する姿が印象的だった。

しかし、この映画に断頭台のシーンを登場させないのはソフィア・ Coppola監督の基本方針……？

そこで、それにかわるハイライトシーンは、ベルサイユ宮殿に押し寄せてきた群衆を前に宮殿のバルコニーに登場し、王妃の威厳を保ちながら民衆に対して深々と頭を下げるシーン。さあ、王妃の姿を見て一瞬静まり返った民衆は、この憎っくきマリー・アントワネットの行動をどのように受け止めたのだろうか……？ それに続く声は「パリへ！ パリへ！」の連呼。これによって、ルイ16世とマリーそして2人の子供たちは、華やかなベルサイユ宮殿を離れパリでの監禁生活に移っていくことに……。

このように、この映画のラストシーンはきわめて静かで、ある意味あっけない幕切れとなっているが、これは当然意図的なもの。もちろん、それはそれで「さよならベルサイユ宮殿！」という余韻を残すエンディングではあるのだが……。

2006（平成18）年10月24日記

ミニコラム

### マリー・アントワネットあれこれ

日本人がマリー・アントワネットをよく知っているのは、宝塚歌劇『ベルサイユのばら』のおかげ。したがって、マリー・アントワネットとフェルゼン伯爵以上にオスカルとアンドレの2人が有名……？

マリー・アントワネットものは他にもいろいろある。「首飾り事件」に焦点を当てた映画が『マリー・アントワネットの首飾り』（01年）。ここではヒラリー・スワンク演じる、王室への反逆者とされた父を持つ娘ジャンヌが主人公。大地真央主演の松竹座のセリフ劇や涼風真世主演の東宝ミュージカル

もあるが、断然面白いのは後者。これは遠藤周作の原作にもとづくもので、同じMAの頭文字を持つ、飢えと貧困による生き地獄のようなパリに生きる娘マルグリット・アルノーが登場し、主役を喰ってしまうほどの演技と歌唱力を見せる。もちろん、マリー・アントワネット物語のハイライトは断頭台のシーン。その歴史の上の事実は1つだが、解釈は人それぞれだから、その工夫が面白い。そう考えると、ソフィア・Coppola監督版のマリー・アントワネットは……？

2007（平成19）年3月8日記